

「は」の「対比」の用法に関する考察

川 俣 沙 織

1. はじめに

「は」構文は、大野(1993)で、「は」は「日本語の文の構成法の基本的部分にかかわる役目を負う」と述べられている通り、日本語において基幹的なものであり、「は」に関する研究は長年において行われてきた。代表的・体系的なものとしては、青木(1992)、大野(1987)、尾上(2001)、野田(1996)、丹羽(2006)などがある。それぞれの「は」の理解として注目されるのは、「結合のとりたての働き」(青木)、「問い-は-答え」の構造(大野)、「二分結合の働き」(尾上)、『は』と『が』の階層差(野田)、課題構造の設定(丹羽)などである。益岡(2000)では、「助詞『は』には一般に主題(題目)を表す用法と対比(対照)を表す用法がある」と述べられているが、現在、この二つの用法が「は」に認められることは周知の事実である。他方、尾上(1995)では全ての「は」をこの二用法に分けることは適当ではなく、「額縁的詠嘆」の用法も存在することが指摘されているが、「は」の中心的な用法が「主題」と「対比」の二用法であるということは、日本語学研究において概ね総意であると言えよう。

この論考では、従来、「は」の重要な用法として認められる「主題」と「対比」について考察する。特に、「対比」の用法と言われてきた例の中に「主題化」とも言うべき用法が認められることと、「対比」の在り方に細かな違いがあることを述べたい。

2. 「は」の構文的分類

まず、係助詞「は」の文を構文的に分類しようと思う。ここでは、「は」の上接部を動詞、名詞といった具体的品詞名で分析・分類するのではなく、「は」が文の中でいかなる成分を受けるのかにより、分類を行う。上接部の品詞による分類は、より細かな分類であるといえるが、上接部の成分と述語のあり方を示すことが分類の第一歩であると考えためである。つまり、「は」の文を、文の構成要素の関係性による最も大きな枠組みで分類しようとするものである。

第一の分類として挙げられるのは、「主語+『は』+述語」の形式である。即ち、「は」の上接部(以下、前件とする)が主語、「は」の下部(以下、後件とする)が述語となるものであるが、これには次のⅠ～Ⅲのタイプがある。

- I 私は学生です。
- II 僕は健康だ。
- III 鳥は飛ぶ。

Iの例は、「は」の前件に「私」が置かれ、後件に「学生」＋「です」が置かれている例である。前件「私」と後件「学生」は一体的なものであり、前件と後件は主述関係にある。

IIの例は、「は」の前件に「僕」が置かれ、後件に「健康」＋「だ」が置かれている（所謂、形容動詞の）例である。Iの例とは違い、前件と後件の「健康」は一体的なものではないが、構造的には前件と後件は主述関係の表し方である。よって、本論では分類上同じ扱いとする。

IIIの例は、「は」の前件に「鳥」が置かれ、後件に「飛ぶ」が置かれている例である。「は」の前件「鳥」は「は」の後件「飛ぶ」の動作主体であるが、この両者も主述関係にある。尚、後件が形容詞であれば、前件は属性主となるが、その場合も主述関係としては同構造である。以下、それぞれの類例を挙げ、説明を加える。

用例

< Iの類例 >

- ① 京極堂は古本屋だ。（京極夏彦『姑獲鳥の夏』）
- ② これは本心である。（同上）
- ③ これは立派な告白です。（三島由紀夫『不道德教育講座』）

①の例は前件に「京極堂」が置かれ、後件に「古本屋」＋「だ」が置かれている例であり、前件「京極堂」と後件「古本屋」は一体的なものである。前件と後件は主述関係にある。②・③も同様に、前件「これ」・「これ」と後件「本心」＋「である」の「本心」・後件「告白」＋「です」の「告白」は一体的なものであり、前件と後件の両者は主述関係にある。

< IIの類例 >

- ④ すべてウソは独創性である。（三島由紀夫『不道德教育講座』）
- ⑤ 迷い込んだ林道は、黒洞々たる闇であった。（浅田次郎『プリズンホテルⅠ夏』）

④の例は、前件に「ウソ」が置かれ、後件に「独創性」＋「である」が置かれている例であり、主述関係にあるが、①から③の例とは異なり、前件「ウソ」と後件「独創性」＋「である」の「独創性」とは一体的なものではない。⑤の例も同様に、前件「林道」と後件「闇」＋「であった」は主述関係にあるが、「林道」と「闇」の両者は一体的なものではない。

<Ⅲの類例>

⑥ 博雅は声^はをあげた。(夢枕獏『陰陽師 太極ノ巻』)

⑦ 彼の生^いいたちは貧^ししかった。(東海林さだお『鯛ヤキの丸かじり』)

⑥の例は、前件に「博雅」が置かれ、後件に「あげた」が置かれている例である。前件「博雅」は後件「あげた」の動作主体であり、両者は主述関係にある。

⑦の例は、前件「生い立ち」は後件「貧しかった」の属性主体であり、両者は主述関係にある。

第二の分類として挙げられるのは、「連用語＋『は』＋述語」の形式である。即ち、「は」の前件が、述語に対して連用修飾に働くものである。次に例を挙げる。

IV 上^はにはある。

V しばらく^はは行けない。

IVの例は、「は」の前件に「上」＋「に」が置かれ、後件に述語として「ある」が置かれている例である。前件「上」＋「に」は、連用修飾として述語「ある」に係っており、連用語である。

Vの例は、「は」の前件に「しばらく」が置かれ、後件に述語として「行け」＋「ない」が続く形である。前件「しばらく」は、副詞であり、連用語である。以下に、それぞれの実例を挙げ、説明を加えておく。

用例

<IVの類例>

⑧ もうじきクランクアップで、秋^{には}は公開されますよ。(浅田次郎『プリズンホテル Ⅰ夏』)

- ⑨ 「俺には直せない機械なんてないんだけどなあ」(浅田次郎『プリズンホテル1 夏』)
⑩ 「非礼はお詫びします。」(京極夏彦『姑獲鳥の夏』)

⑧の例は前件に「秋」＋「に」が置かれ、後件に「公開される」が続くものであり、前件「秋」＋「に」が連用修飾語として述語「公開される」に係っており、前件は連用語である。

⑨の例も同様に、前件「俺」＋「に」が後件「ない」に連用語として係っているものである。

⑩の例は前件「非礼(を)」が後件「お詫びする」に連用語として係っているものであるが、「は」の存在により「を」が無形化しているものである。

< Vの類例 >

- ⑪ 「野球の本ばかり読んでないで、ちょっとは一緒に考えてほしいんだけど」(小川洋子『博士の愛した数式』)
⑫ い、今はまずい。(京極夏彦『百器徒然袋 雨』)

⑪の例は前件に「ちょっと」が置かれ、後件に、述語として「考える」が置かれている例であり、前件が後件に連用語として係っている。

⑫の例も同様に前件「今」が後件「まずい」に係っており、前件は連用語である。

第三の分類として挙げられるのは、文の述部にあたるところに「は」が挿入されたものである。次に例を挙げる。

VI 遠くはない。

VII 見はしない。

VIの例は、「遠くない」という述部に「は」が挿入されたもので、「は」の後件「ない」単独では述語とは見なせない。

VIIの例は、「見ない」という述部に「は」が挿入されたものであり、「は」の前件が語幹「見」になることで、後件が「しない」となったものである。以下、それぞれの類例を挙げ、説明する。

用例

< VI の類例 >

⑬ 「いや、別に忙しくはないです。」(京極夏彦『姑獲鳥の夏』)

⑬の例は、「忙しくない」という述部に「は」が挿入されたものであり、「は」の後件「ない」単独では述語とは見なせない。

< VII の類例 >

⑭ 繊細さや几帳面さを失った訳ではななかったが、周囲は彼にそんなことを求めはしなかった。(京極夏彦『魍魎の匣』)

⑭の例は、「求めない」という述部に代えて「求めはしない」全体で述部とするものである。

以上、「は」の用法の構文的分類は、本論では次の三類となる。従来のものでは、青木(1992)の分類に近く、それに修正を加えた形となる。

第一の分類—「主語+『は』+述語」(I・II・III)

第二の分類—「連用語+『は』+述語」(IV・V)

第三の分類—「述部への挿入」(VI・VII)

3. 「は」の用法上の意味的区別

次に、前節の分類にそって、それぞれの「は」の働きについて考えたい。

まず、第一の分類である「主語+『は』+述語」に関して、Iを例に説明しようと思う。Iの例「私は学生です」は、「は」を挟んで「主題」—「解説」の構造になっている。通常は、そこに並行的な意味が存在しない所謂「主題」の用法と取れる。しかし、同じIの文でも、言外に並行的な意味を含む場合がある。例えば、「彼は社会人だが」の意を含み、その上で「私」が何であるかについて述べている場合、「主題」の用法ではなく、所謂「対比」の用法となる。但し、その用法も、「主題」の用法の「私は学生です」と同様に「主題」—「解説」という構造にはある。

このように、第一の分類のものは、「主題」か「対比」の用法をとる。

第二の分類である「連用語+『は』+述語」については次のように考えられる。IV・Vを例に説明する。IVの例「上にはある」、Vの例「しばらくは行けない」これら二つの例では、「は」は、前件「上に」・「しばらく」を主題とし、後件「ある」・「行けない」を解説しているとは考えられない。即ち「主題」—「解説」の構造とは見なし難い。それらは、「上にある」や「しばらく行けない」といった既に完成された連用修飾の關係に「は」が挿入された形であり、「は」の、文の成立への参加度は第一の分類よりも低いと考えられ、IVの例は「下にはないが」などといった意味を、Vの例は「いずれは行くが」などといった意味を含み、「対比」の用法になる。他の例も見る。

- a おかしな報道には抗議する。
- b 自分ひとりでは変われない。
- c 少しは影響がある。

これらの例は、「おかしな報道に抗議する」、「自分ひとりで変われない」、「少し影響がある」という連用修飾の關係に「は」が挿入された形であり、「は」の、文の成立への参加度は低く、しかも、「正当な報道には抗議しないが」、「他の人の手助けがあれば変えられるかもしれないが」、「大きな影響はないが」などといった意味を含み、「対比」の用法ととるのが一般的である。

以下、前節において挙げたIV・Vの類例についてもそれぞれ説明する。

< IVの類例 >

- ⑧ もうじきクランクアップで、秋には公開されますよ。
- ⑨ 「俺には直せない機械なんてないんだけどなあ」
- ⑩ 「非礼はお詫びします。」

⑧・⑨の例は、「秋に公開される」、「俺に直せない機械なんてない」という連用修飾の關係に「は」が挿入された形であり、「は」の、文の成立への参加度は低く、しかも、「夏にはまだ公開されないが」、「自分以外には直せない機械があるが」などといった意味を含み、「対比」の用法ととるのが一般的である。

⑩の例は、対格の位置に「は」が挿入されたものであるが、その際は「を」が無形化する。「は」の前件があくまで連用語の資格にあることは言うまでもない。「を」

が無形化することでは、「は」の、文の成立への参加度が高いように思われるが、対格であることが自明である以上、「は」の、文の成立への参加度は低いと思われる。ここでも、「他の点に関しては謝らないが」などといった意味を含み、「対比」の用法ととるのが一般的である。

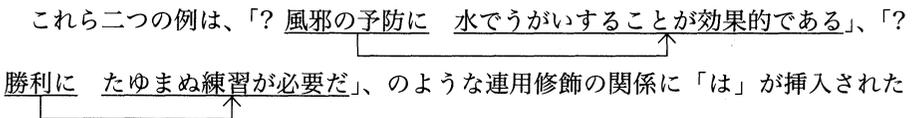
< V の類例 >

- ⑪ 「野球の本ばかり読んでないで、ちょっとは一緒に考えてほしいんだけど」
- ⑫ い、今ははまずい。

⑪・⑫の例は、「ちょっと一緒に考える」、「今はまずい」という連用修飾の関係に「は」が挿入された形であり、「は」の、文の成立への参加度は低く、しかも、「多くは一緒には考えないが」、「少し経ってからなら問題無いが」などといった意味を含み、「対比」の用法ととるのが一般的である。このような対比の用法は、並行的な意味が特定可能なものであり、第一の分類における「対比」の用法もこれに当たる。

ここで次の例に注目したい。

- d 風邪の予防には水でうがいすることが効果的である。
- e 勝利にははたゆまぬ練習が必要だ。

これら二つの例は、「? 風邪の予防に 水でうがいすることが効果的である」、「? 勝利に たゆまぬ練習が必要だ」、のような連用修飾の関係に「は」が挿入されたものとは考え難い。d・eの例は、「は」が不在となると違和感が生ずることから、これらの例における「は」の、文の成立への参加度は高いと考えられる。また、対比的な意味を含む可能性は低いように思われる。

同じ「連用語 + 『は』 + 述語」の例であるにも関わらず、一方では「は」が不在となっても、違和感が生じず、一方では生じてしまうという状況が生ずるのは、「は」が受ける語が、文頭にあるかないかということと関わっている可能性がある。

dの「風邪の予防には水でうがいすることが効果的である」を例にとって説明する。文頭に「風邪の予防には」が置かれている例では、前述のように「は」が不在となると、「? 風邪の予防に水でうがいすることが効果的である」となり、違和感が生ずるが、

試みに、「風邪の予防には」を文頭でない位置に移動し、「水でうがいすることが風邪の予防には効果的である」とすると、「は」が不在となっても、「水でうがいすることが風邪の予防に効果的である」となり、違和感は生じない。

eの例「勝利にはたゆまぬ練習が必要だ」についても説明する。文頭に「勝利には」が置かれている例では、前述のように「は」が不在となると、「?勝利にたゆまぬ練習が必要だ」となり、違和感が生ずるが、試みに、「勝利には」を文頭でない位置に移動し、「たゆまぬ練習が勝利には必要だ」とすると、「は」が不在となっても、「たゆまぬ練習が勝利に必要だ」となり、違和感は生じない。

このように、「は」が不在となると違和感が生ずる例は、その「は」を含む語が文頭に位置していることを原因とする可能性が高いと考えられる。

「連用語+『は』+述語」の例の中で、「は」が不在となると違和感が生ずるものは、筆者が考えるには、「は」が「主題」—「解説」の構造を作る働きにあることをもって、「風邪の予防に」「勝利に」を主題化し、そこに情報を付加するものであるところにあるのではないか。即ち、そこでは「は」の働きは積極的なものであり、よって、「は」の上接語が連用語であるにも関わらず、必ずしも対比の用法にはならないのではないか。これは、「主題化」の用法とでも呼ぶべきもので、「主題」の用法とも、「対比」の用法とも見なせない。

第二の分類「連用語+『は』+述語」の形式で、文頭に「は」を含む語がある場合、実例としてどれくらいの割合で「主題化」するかを示したものが次の表である。

<表>

	用例数	比率 (%)
「主題化」の例	63	48
「対比」の例	68	52
合計	131	100

(櫻井よしこ『日本の危機』より)

表で見る限り、「連用語+『は』」が文頭にある場合は、その約半数が主題化する。「連用語+『は』+述語」の用法は通常「対比」となることからすれば、文頭にあることが「主題化」の用法の成立に深く関係していることが推定される。

次に、第三の分類「述部への挿入」についてであるが、VI・VIIを例に説明する。

VI 遠くはない。

VII 見はしない。

VI、VIIそれぞれは、既に完成された述部に「は」が挿入された形であり、これらの例における「は」は、前件「遠く」・「見」を主題とし、後件「ない」・「しない」を解説しているとは考えられない。即ち、「主題」—「解説」の構造とは見なし難い。

しかし、前述の「連用語＋『は』＋述語」の場合のような並行的な意味を想起させる「対比」の用法(IV・V、a・b・c)であるとするのにも抵抗感がある。「連用語＋『は』＋述語」の文であるIVの例「上にはある」は、「上」に対する対立項「下」が容易に想定でき、「ある」に対する対立項「ない」が同様に想定できる。しかし、「述部への挿入」の分類に属するVIの例「遠くはない」を例にとって説明すると、この例は、並行的意味として、「遠く」の対立項が「近く」であり、「ない」の対立項が「ある」であるというものではない。「遠くはない」から生ずる並行的な意味は、せいぜい「そんなに遠くはない」「遠いというほどではない」といったもので、「遠く」「ない」の対立項である「近く」「ある」、即ち「近い」とはずれが生じてしまう。このことは、「述部への挿入」における「対比」の用法が、「連用語＋『は』＋述語」における「対比」の用法とは異なった側面を持っていることを表しているのではないだろうか。

「述部への挿入」の例「遠くはない」は、「遠い」ということのみを否定している。そして「遠い」ということのみを否定することによって、その周辺である「そんなに遠くはない」や「遠いというほどではない」などへの肯定、即ち、周辺的事実の多くを並行的意味として想定し得るという結果を生むのではないだろうか。また、「遠くはない」において、「遠い」の正反対に位置する「近い」が並行的意味として考え難いのは、「は」を含まない「遠くない」の並行的意味として「近い」が想定し得るためであると考えられる。(VIIの例「見はしない」については後述する。)

この表現は、ある情報を伝えようとする際に、直接的表現による種々の問題を避けるため、婉曲的表現を選択する要求により発生した文であると考えられる。これは、「連用語＋『は』＋述語」における「対比」の用法とは異なる「対比」の在り方であり、両者は明確に区別されるべきである。他の例も見ろ。

f 暑くはない。

g 生きはしない。

これら二つの例はVIの例に用法的に相当するものである。

fの例は、「暑くない」という既に完成された述部に「は」が挿入されたもので、

「は」の、文の成立への参加度は低い。その意味するところは「そんなに暑くない」などといった程度であり、「は」を間に挟む「暑く」「ない」それぞれに、対立項として「寒く」「ある」が想定されるというものではなく、並行的な意味として「寒く」「ある」即ち「寒い」が想定されるというものではない。「暑い」以外の周辺的事実の多くを並行的な意味として想定し得る「対比」の用法である。

また、gの例は、「生きない」という既に完成された述部に「は」が挿入され、「は」の前件が「生き」に、後件が「しない」に変化した形である。その意味するところは「積極的に生きようとは思わない」などといった程度であり、「は」を間に挟む「生き」「ない」の対立項である「死に」「ある」、即ち「死ぬ」ということを意味するものではない。「生きる」以外の周辺的事実の多くを並行的な意味として想定し得る「対比」の用法である。

以下、前節において挙げたVIの類例についても説明する。

<VIの類例>

⑬ 「いや、別に忙しくはないです。」

⑬の例は、「忙しくない」という述部に「は」が挿入されたものであり、「は」の、文の成立への参加度は低い。その意味するところは「そんなに忙しくない」などといった程度であり、「は」を間に挟む「忙しく」「ない」それぞれの対立項として「暇で」「ある」を想定するものではない。「忙しい」以外の周辺的事実の多くを並行的な意味として想定し得る「対比」の用法である。

ここで次の例に注目したい。

h 嬉しくはない。

i 教室ではない。

hの例は、「嬉しくない」という既に完成された述部に「は」が挿入された形であり、「は」の、文の成立への参加度は低いと思われる。ここでは、「嬉しい」ということのみが否定されており、「嬉しい」以外の周辺的事実の多くを並行的な意味として持つ。iの例は、「教室」以外の場所を暗示している。但し、fの例「暑くはない」は、「は」を間に挟む前件と後件の対立項としてそれぞれ「寒く」「ある」(=「寒い」)が想定

でき、gの例「生きはしない」も、「死に」「ある」(=「死ぬ」)という対立項を想定することが容易であったが、これらh・iの例の場合、前件の対立項として何を想定したものか判然としない。「嬉しい」・「教室だ」の対義語として何を想定したものかは判断に迷うところである。

つまり、h・iの例は、「は」の前件を否定するという点ではf・gの例と共通するが、「は」の前件の対立項を明確に一つに定めることが出来ないという点により、更に並行的な意味が特定し難くなっている。つまり、h・iの例がf・gの例よりも更に対比の意味が薄いことを表しているのである。このことから、対比用法の在り方には段階差があるということが言えるのではないだろうか。この観点からすれば、前掲Ⅶの例「見はしない」は「見」の対立項が明確に定められないことから、h・iと同類であるということが言える。Ⅶの例「見はしない」も、「は」の前件の対立項を明確に定めることは困難であり、並行的意味が特定し難い「対比」の例である。

以下、前節において挙げたⅦの類例についても説明する。

<Ⅶの類例>

- ⑭ 繊細さや几帳面さを失った訳ではなかったが、周囲は彼にそんなことを求めはしなかった。

⑭の例は、「求めない」という表現に代えて「求めはしない」全体で述部とするものである。これは、「求める」ことのみを否定し、しかも、「求める」に明確な対立項が想定され難いことにより、それ以外の周辺的事実の多くを並行的な意味として想定し得る「対比」の用法となる。

このように、第二の分類「連用語+『は』+述語」の例においては、「は」があることによって並行的な意味がほぼ特定されるのに対し、第三の分類「述部への挿入」の例では、「遠い—近い」「暑い—寒い」「生きる—死ぬ」のように、元来、対立概念を有している表現に「は」が挿入されれば、対比される並行的意味に幅を持たせる結果を生み、「見る」「嬉しい」「教室だ」のように、対立概念が“想定”はできるが“特定”し難い「述部への挿入」では、対比される並行的意味が更に曖昧になるのである。

上記のことをまとめると、次のようになる。

- 第一の分類 — 「主語+『は』+述語」 { 「主題」の用法
「対比」の用法④…並行的意味・特定型
- 第二の分類 — 「連用語+『は』+述語」 { 「対比」の用法④…並行的意味・特定型
「主題化」の用法
- 第三の分類 — 「述部への挿入」 { 「対比」の用法⑥…並行的意味・幅広型
「対比」の用法③…並行的意味・曖昧型

4. 結び

これまで特に区別されるものではなかった「対比」の用法であるが、その中に、「連用語+『は』+述語」の例において「は」が不在となると違和感が生ずる「主題化」とも言うべき用法が認められることと、「連用語+『は』+述語」及び「述部への挿入」の例における「対比」の在り方には細かな違いがあることを述べた。

以上、「は」の構文上の区別と、「主題」・「対比」という用法上の区別とが、一定の関係にあるということが明らかになったと言える。

<参考文献>

- 青木伶子(1992)『現代語助詞「は」の構文論的研究』笠間書院
 大野 晋(1987)『文法と語彙』岩波書店
 大野 晋(1993)『係り結びの研究』岩波書店
 尾上圭介(1995)「『は』の意味分化の論理—題目提示と対比—」『月刊言語』24巻11号
 尾上圭介(2001)『文法と意味I』くろしお出版
 野田尚史(1996)『「は」と「が」』(新日本語文法選書1) くろしお出版
 丹羽哲也(2006)『日本語の題目文』和泉書院
 益岡隆志(2000)『日本語文法の諸相』くろしお出版

【付記】

本稿は、平成18年度西日本国語国文学会(於：山口県立大学)での口頭発表に基づく。席上、ご意見を賜った関一雄先生、木部暢子先生に感謝申し上げます。